

建築板金工

薄い金属板の加工から取り付けまで、屋根や外壁、雨樋などの工事・リフォームを手がけるのが建築板金工。銅板鍛金技法の技術がある建築板金工は、一般住宅だけでなく寺社の仕事も請け負うことができ、美術作品も創作する。

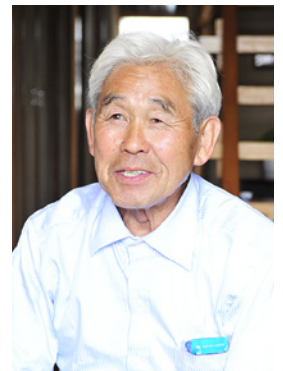
金属板を手作業で成形・加工 銅板鍛金技法に手腕を発揮する

菅原光夫

技術力のある建築板金工は、屋根や外壁、雨樋のほか、優れた美術作品もすべて手作りで仕上げます。既製品を取り付ける作業が仕事の中心になっている今、菅原光夫さんは、一から製品を作り上げていくという建築板金工が本来あるべき姿を貫いています。



現在取り組んでいる仕事は稲荷神社の屋根。製品が小さく、曲線のパーツが多いので、作業は難しい。また、参拝客が間近で目にするため、より丁寧な仕上がりが求められる。もちろん隠し釘を使用



すがわら・みつお

1946年、岩手県生まれ。15歳のときに上京し、東京都千代田区の江野澤板金に弟子入り、住み込みで修業する。23歳で独立し、千葉県八千代市大和田で開業。27歳のとき、八千代市村上に移転し現在に至る。建築板金一級技能士。昨年、「現代の名工」に選定される。

屋根や外壁から装飾品まで
手がける製品は幅広い

菅原さんは15歳で親方のもとに弟子入りして以来、70歳になる現在まで建築板金工一筋に歩んできました。銅やステンレスなどの薄い金属板を切ったり曲

げたり叩いたりすることで成形し、所定の場所に取り付けるまでの一連の作業を行うのが建築板金工です。屋根や外壁、雨樋、厨房用金物、天蓋、排気筒のほか装飾品など、手がける製品は多岐にわたります。

取り付けまでが仕事ですから、たと

えば外壁にタイルを貼ることも。最近では金属製のベースを取り付けた上からタイルを貼るため、ベースの取り付けからタイル貼りまでを行います。ベースを正確に取り付けると、タイルの並びも美しく仕上がらないからです。このように金属を扱う作業はすべて建築板金工がこなしています。

「近年はハウスメーカーの住まいが多くなり、それに伴い既製品を使うようになってきているため、単なる取り付け屋になってしまっている板金工が多いんですよ。そういう仕事ばかりしていると技術を磨くことはできません」

菅原さんは、基本的にすべての製品を自分の手で作り上げます。一枚の銅板を木槌や金槌で叩いて形成していく「銅板鍛金技法」に卓越した技能を持っており、この技は風格と美しさが求められる寺社建築には欠かせません。

「一般住宅ではカラー塗装したガルバリウム鋼板を使うことが多く、これは打った釘が見えてもかまいません。しかし、寺社の場合は見た目の美しさが重要なので、『隠し釘』といって釘が見えないよ



- 1 真竹を模した雨樋は、菅原さんが開発したオリジナル。稲穂をくわえたスズメや、風で揺れるケヤキの葉などあいらしい情緒豊かに仕上げている
- 2 すべて銅で手作りの郵便受け。鍛金によって表現された表面の細かい凹凸に味がある
- 3 金属の厚みや硬さによって道具を選ぶが、壁面にはさまざまな道具がずらり。ハサミの場合、建築板金工が使うハサミはやわらかい刃でできている
- 4 市販飲料の缶を加工して製作したミニチュアの車。菅原さんの遊び心が感じられる
- 5 建築板金工の仕事は幅広い。これは新築祝いなどに贈る家紋
- 6 鍛金によって打ち出された恵比寿と大黒。銅板の厚さは0.3mmで、加工するのが難しい。叩き過ぎると穴が開くため、叩いたときの音を聞いて、やめどきを判断する

うに打ちます。銅を扱うには技術力が
必要なんですよ」

いい仕事をして正当な対価をいただ
くのがポリシーだと語る菅原さんは、
満足できる仕事ができるときに大きな
喜びを感じるそうです。

「納得できる仕上がりになるまで徹底
的に取り組むと、手間がかかります。
手間をかけた分、儲かるわけではあり
ませんが、儲けより、いかに納得できる
仕事をするかが重要なんです。仕事と
は、そういうものではないでしょうか」

菅原さんは、プロとしての誇りと責
任を胸に刻みつけて、日々仕事に取り
組んでいます。唯一苦労されているのは、
都市部で顕著に見られる人間関係の希
薄さによる仕事のしにくさです。

「私たちが現場作業をするのは住宅街
が多く、道路に駐車して作業するにも
配慮が必要です。近所同士のコミュニ
ケーションがなくなっているからなん
ですね。仕事がいかに世の中になり
ました」

特殊な技術を求められるときに備えて 若手は技術・応用力を磨いておくべき

般若や恵比寿・大黒などの装飾品の
創作にも手腕を発揮し、優れた造形美
を生み出している菅原さんは、銅板加
工美術展で千葉県板金工業組合理事長
賞の受賞や千葉県の卓越した技能者に
選ばれるなど高い評価を得ています。

その技術を次世代に継承するため、組
合の銅板加工美術展で若手を指導する
ことに力を注いでおり、後進の育成こそ
が今後自身が取り組むべき目標だと考
えています。

「取り付け屋になっていく板金工が多い
ので、技術力の高い板金工を育ててい
かなければなりません。美術作品を作る
ことによって、さまざまな技術が習得で
きますし、応用力も身につく技術の幅
が広がります。特殊な技術を求められ
る仕事にきたときに備えておくことが、
若手には重要だと思いますね。寺社の
場合は尺貫法を用いるので、その知識
も必要です」

菅原さんには後継ぎがいないため、
意欲のある若手には自分の技術を惜し
みなく注ぎ込み、どんな仕事にも対応
できる人材を育てたいと語ります。

自身も常に学ぶことを忘れません。
たとえば、旅行に行ったときも、その地
の建築板金工がどんな仕事をしている
のか気になり、寺社だけでなく街並み
を眺めて勉強する機会にしていると
か。

菅原さんは、「現代の名工」に選定さ
れたことより、同業者の組織である組
合から推薦されたことが何よりもうれ
しいと語ります。

「長年やってきて、ホントによかったと
思いますね。同業者が認めてくれた技
術を若手に継承し、後進の育成に貢献
することが私の務めだと考えています」